27AB-pm424

松山大学「薬学史」講義におけるマラリア

○牧 純[1], 関谷 洋志[1], 相良 英憲[2], 山口 巧[2], 玉井 栄治[1], 河瀬 雅美[3]（[1]松山大薬生体環境系薬学講座感染症学研究室, [2]松山大学薬学部臨床薬学教育研究センター, [3]松山大薬化学系薬学講座有機化学研究室）

【序論、材料･方法】松山大学では文系理系学生を対象に下記の教科書で開講の薬学史「薬と健康の歴史」（90 分 15 回）の講義で、マラリア史が扱われる。その改善（牧ら 2015:第 54 回中四国支部大会）は現在も継続している。【結果・考察】古より日本人を悩ましてきたマラリアは「わらはやみ」とも呼ばれ、例えば鎌倉時代（1280 年前後）にも、阿仏尼著『十六夜日記』にも記述がある。明治以降は北海道（瀬棚地区）にも分布がみられたが、国内での制圧には成功してこの半世紀間新たな感染は認められない。しかし、国際交流面では依然として大きな問題で、人的な被害も甚大である。外国人感染者の来日及び邦人の海外旅行で感染するケースも珍しくない。その予防・診療は薬剤師にとっても重要なテーマである。以上の情勢を考量すると、本症は 21 世紀の現在も最も重大な感染症の 1 つといえる。この治療では、伝統的な生薬であったキニーネが今日も有用である。治療剤プログアニル、ピリメサミン、メフロキンも注目される。元来優れた治療薬クロロキンには、薬剤耐性の問題がある。肝内に病原が休眠する 2 種、すなわち三日熱･卵形マラリアは根治療法にプリマキンの投与も必要となる。2013 年にはアトバコン・プログアニル塩酸塩が薬価収載された。中国の伝統的な抵抗マラリア剤チンハオスは、作用機序がクロロキン等とは異なるゆえ薬剤耐性の問題の視点からも注目すべき薬剤である。本剤に関する優れた研究で中国の TuYouyou 女史は 2015 年のノーベル生理･医学賞に輝いた。【文献】牧 純著『国際医薬史入門－歴史から読み解く薬と健康』（2015、青山社、ISBN 978-4-88359-338-5）